

研修会報告

滋賀支部 2019 年度地域公開講演会

テーマ：子どもの育ちと「音」環境 —活動を支える「環境空間」への視点—

2019年12月8日（日）にヴォーリス学園平和礼拝堂にて埼玉大学名誉教授・同志社大学赤ちゃん学研究センターの志村洋子先生にご講演をいただきました。

今回は滋賀支部で初めてヴォーリス学園平和礼拝堂（建物の5階にあります）を使用させていただきました。ヴォーリス学園のご高配によるものですが、後にも記すように本講演をいただくのに大変適した会場でした。

講師の志村先生は当日会場に入られるやいなや、掌をぱぁんと打ち合わせられたそうです。そして掌から出る音の残響時間は2秒だったとのこと、講演は、このお話から始まりました。礼拝堂の空間は天井が高く、残響時間が長いことが、歌を歌ったり、素敵な音を奏でたりすることには適しています。先生は声楽家でもいらっしゃるの、本当ならば素敵なお声で歌を歌いたい♪ような心中でおられたようですが、「今日は講演会！」ということで以下のお話をされました。



- ・子どもにとって望ましい「環境」について「音」の視点から考えると、日本の保育室は「音」に対して配慮がなされておらず、逆に「音」環境の非常に劣悪ななか、子どもたちが保育され、保育に携わる専門職もそのことを知らずに過ごしているのが現状である。

- ・最近の保育室の傾向として「残響時間」が長いという状況がある。これは流行りの「オープンスタイル設計」「デザイン重視」で高い天井、広々とした空間のためである、子どもたち（保育者も）が発する音（声）が「残響時間」の長さで音が重なり合い、騒音状態の保育室となっていることに気がついていない保育園・幼稚園が多い。

- ・「育ち」を支える「室内」空間（環境）に必要な視点のなかに、日本では「音」が入っていない。このことは、乳幼児期の子どもたちの「選択的聴取力」を育むことを阻んでいる。

- ・「音」環境への視点がないままに保育がなされると、「音声の音量コントロール」などができないままに育ってしまう懸念がある。

志村先生らのご研究では、さまざまな能力が育っていく過程にある乳幼児期の子どもたちが、どれだけの「音」に暴露され過ごしているのかについて調査したところ、保育室が「騒音」状態（概ね地下鉄の車内状態レベルに相当）にあり、聴力に影響が生じていることが示唆されました。音環境を良くするための試みの一つとして、残響時間を減らすために、吸音材を保育室内につけることで改善がみられるそうです。そうした取り組みの結果、残響時間を短くでき、音環境が改善されるというデータをお示しくいただきました。



参加者のわたしたちも実際に「騒音状態」に近い状況のなかで聞き取ることができるかどうかを体験させてもらいました。各グループで和やかにテーマに沿って話す時間が設けられたのですが、その途中で壇上の志村先生が何か話されました（ようでした）。しかし、誰もそれを聞き取れていませんでした。他方、大人は自分に関係するようなこと（例えば名前を呼ばれたり）であれば、「騒音状態」にあってもパッと聞こえます（＝カクテルパーティ効果：選択的聴取）。この能力は赤ちゃん（乳幼児期）にはまだ育っていないそうです。途中でこのような体験をはさんでいただきながら、講演は後半へと進みました。

後半では、「赤ちゃん学」から得られた知見をお話いただきました。音声言語の獲得過程において「赤ちゃん」からの「かかわり」を優先することの大事さを話されました。赤ちゃんが「タブララサ」ではない、赤ちゃんが素晴らしい能力を備えていること、「赤ちゃんがうごく、さわる」をじゃましない。「赤ちゃんが声を出す」をじゃませず、「赤ちゃんのもつ生得的な音楽性」から生じる発声を大切にしてくれるような「環境」を意識した子育て・保育が大切であることをお伝えくださいました。そして、この日の講演のスペシャルゲストともいえる「赤ちゃん」（参加者のお一人がお連れになっていたお子さん）の声に志村先生が応答され、それに赤ちゃんが応答し、と志村先生と赤ちゃんの協調による即興音楽♪を聴かせてもらうことのできた奇跡の講演会となりました。乳幼児の子どもたちが表出している「律動」を共有することから始める「音環境」「絆の音楽性＝コミュニケーション・ミュージカルティ」について、学ぶ機会となりました。

この秋、「赤ちゃん学」創設の中心となってこの領域の研究を推進してこられた小西行郎先生が逝去されました。その報せに哀悼の想いの深い参加者もおられたと思います。「赤ちゃん学」の同志として活躍されている志村先生のお話を拝聴する機会を得て、何より志村先生が楽しそうにお話くださったことで、この分野の研究会などに積極的に参加して赤ちゃん学を楽しみ、理解を深めたいと思われたのではないのでしょうか。



当日は朝9時半からの開催にもかかわらず、県外からも多くの参加者がありました。臨床発達心理士有資格者が43名、就学前施設、発達支援センター、学校等に所属の方も含め、一般参加者が31名の合計74名でした。

日本臨床発達心理士会滋賀支部